大震災からの復興

関東大震災は、多くのぎせい者を出した。命が助かった人々も家族や住む家を失い、今までのあたりまえだった日常生活がうばわれた。この震災で都市のもろさがうきぼりになったが、人々の多くは、焼けあとに戻り、再建へとみんなで力をつくした。

<みんなで町を立て直せ>

中央区では、まず、町中にあるがれきの後片づけからはじめた。焼けあとを新しい都市にふさわしい町にするため、区画整理を行い、道路も広くつくり直した。家を失った人々は当初はバラックに住んでいたが、だんだんと住居が整えられた。ビルがいくつも建ちはじめ、中央区の町が高層化する第一歩となった。

復興しつつある中央区の町なみ1930(昭和5)年。

(上)現在の日本橋二丁目の日本橋交差点付近。車の車輪の片づけをする兵士たち。
(下)常盤橋近くに焼けた残がいが集められた。

復興に向かって

まず焼けあとにバラックがつくられた。商店は次々にこのバラックで再建した。小学校の校舎もバラック建築でつくられた。

復興第1号店は、現在の日本橋本町二丁目にあった、絵の具染料問屋の黒田商店。震災から約1か月後の10月15日に仮営業所で開店した。

(上)銀座八丁目にあった資生堂は、11月に営業を再開。
(左)銀座六丁目にあった森永キャンデーストアー。12月20日に再開した。

久松小学校の復興のようすがよくわかる絵葉書。右上は震災前の校舎。左下は震災1年後に建てられたバラック校舎。中央は現在も使われている新校舎。

立て直しのための計画

1889（明治22）年に東京市が発足してから町の整備計画がつくられたが、なかなか進まなかった。しかしこの震災が起こったため、急いで整備する必要が生まれた。当時の内務大臣だった後藤新平はさまざまな計画を立て、一気に実現させていった。道路を広げ、河川、運河をつくり直し、公園や学校をつくるなど、町を整備する計画はいくつも立てられた。

●河川や橋

日本橋中洲にかけられた清洲橋❻。日本一モダンな橋といわれた。

西堀留川❶、鉄砲洲川❷、入船川❸は埋め立てられて道路などになった。さらに楓川と築地川をつないだり❹、京橋川、築地川、汐留川❺などが整備された。また川にかかる橋は、ほとんど落ちてしまったため、新たにじょうぶなものにつくりかえられた。

●道路

前からあった道路は廃止されたり、幅を広げたり、新たにつくられたりした❼。東京市内では、53本のおもな道路が整備され、中央区の町なみもずいぶんと変わっていった。

新しくつくられた昭和通り❽。幅が広く44mあるが、当初は108mと計画されていた。

●公園

広い土地につくられた浜町公園。

この震災の経験をふまえて、火事からのがれる場所や一時避難所として、公園が新たにつくられた。中央区では浜町公園❾のような大規模な公園や、小学校のとなりにも公園がつくられた。

●魚市場の移転

今の場所に移ってきたばかりの魚市場。

日本橋にあった魚河岸も全部焼けてしまった。前から移転計画はあったがなかなか実現しなかった。震災直後はとりあえず築地の海軍技術研究所あとに市場を開いた❿。

復興事業が行われたおもなところ

復興のためにカをつくした人

後藤新平は、復興院の責任者となり、被害にあった人々を救おう、町を復興させようと、力のかぎり働いた。焼けあとをすべて買い上げて再整備しようと復興予算を当初30億円と計算したが、さまざまな反対にあい、結局5億7000万円にけずられてしまった。

後藤新平(1857〜1929)

岩手県出身。政治家。もともと医者だったが衛生局に入局。1903（明治36）年貴族院議員、1920（大正9）年東京市長となる。震災後は、帝都復興院の責任者として東京の復興計画を立てた。

おめでとう復興！ 新しい町へ

(左)銀座の町なみを楽しむ人々。
2大デパートとよばれた松坂屋(下左、1924年開店)と松屋(1925年開店)。

震災復興後、銀座の町は大きく変わった。松坂屋、松屋、三越があいついで開店した。カフェーやレストランができ、おでん屋、すし屋などの飲食店も集まった。歌舞伎座や新橋演舞場が再建され、映画館も多くなり、人々は銀座へ集まるようになった。大正の終わりから昭和のはじめにかけては、モガ、モボ（モダンガール、モダンボーイ）とよばれるおしゃれな若者が現れた。

❗ 築地市場は、土地の権利関係など問題も多く、現在の場所で業務を開始したのは、1935（昭和10）年のことだった。